

西九州大学  
健康栄養学部紀要  
第1巻別刷  
(2015)

# 西九州大学神埼キャンパスにおける喫煙実態調査 学部学生の特徴について

A Survey on Smoking on the Kanzaki Campus of Nishikyushu University  
characteristics of undergraduate students

松田佐智子、横尾美智代

Sachiko Matsuda, Michiyo Yokoo

# 西九州大学神埼キャンパスにおける喫煙実態調査 学部学生の特徴について

松田佐智子<sup>1,2</sup>、横尾美智代<sup>1</sup>

西九州大学大学院生活支援科学研究科<sup>1</sup>、西九州大学短期大学部食物栄養学科<sup>2</sup>

(平成27年2月25日受理)

## 和文要旨

神埼キャンパスの学部生に対し、喫煙に関する質問紙調査を行った。その結果、150人(学部生の14.1%)が喫煙者であることを示した。喫煙者の割合は、男子学生25.4%、女子学生6.9%であった。学部生の約10%(117人うち男性86人、女性31人)は習慣的に喫煙していた。所属学科別では、リハビリテーション学科の喫煙者割合が高かった。喫煙者の平均年齢は20.4歳、FTND(ファーストロームのニコチン依存度指数)の平均値は中程度であった。未成年喫煙者は39人(26.0%)で、そのうち80%が男子学生であった。未成年と成年の喫煙者を比較すると、喫煙を開始した時期と動機、所属において有意な差が見られた。しかし、FTNDでは有意な差は見られなかった。

キーワード：喫煙、大学生、未成年

## 1 はじめに

WHO（世界保健機構）が喫煙による健康に及ぼす悪影響から現在および将来の世代を保護することを目的とした「たばこ規制枠組み条約（FCTC）」が採択されてすでに10年以上が経過した。本条約への締結国は100カ国を越え、多くの国で喫煙の規制と健康被害防止が共有されている<sup>1)</sup>。我が国において平成17年に本条約が発効された。前後して平成14年にはたばこ規制に関連する国内法として「健康増進法」が施行され、第25条において公共施設管理者は受動喫煙防止対策の努力を義務付けられることとなった<sup>2)</sup>。健康増進法に基づく国民健康づくり運動「健康日本21」では我が国が対応を必要とする最重要分野の1つに選ばれ、未成年の喫煙の根絶や禁煙希望者への支援が実施された。その結果、高校3年生男性の喫煙率は36.9%（平成8年）から21.7%（平成16年）、8.6%（平成22年）と有意な減少がみられた<sup>3)</sup>。2013年から開始された「健康日本21（第二次）」においても、喫煙は引き続き重点分野の1つであり、未成年の喫煙をなくすこと、成人の喫煙率を12%（平成34年）にすることを目標値が設定された<sup>4)</sup>。また、平成22年には厚生労働省健康局長通知には「多数の者が利用する公共的な空間については、原則として全面禁煙であるべきである」との文言が含まれていた<sup>5)</sup>。このように国内外で受動喫煙防止や喫煙による健康被害の認知度を高め、喫煙率の低下を図る対策が進められている。

特に高等教育機関に限定した状況について見てみると、現在206大学、26短大が敷地内（キャンパス）内禁煙を実施しており、その数は医療系学部を中心に年々増加している<sup>6)</sup>。特に日本赤十字豊田看護大学、兵庫医療大学など新設校では開学時から全面禁煙を実施している大学もみられる。さらにこれまでは実施が困難と言われていた大規模校においても東北大学、立命館大学で敷地内全面禁煙が開始され、大阪大学は平成29年度の全面禁煙実施を目標に準備が進められている<sup>7)</sup>。

本学は管理栄養士、社会福祉士、健康運動指導士、理学療法士、作業療法士など医療従事者を養成する医療・福祉系の大学であるが、現在の喫煙対策は建物内禁煙に留まっており、敷地内禁煙は実施されていない。喫煙の実態については、学生のライフスタイル調査の一環としての喫煙状況調査は実施されているが、研究目的からの喫煙実態調査は今までのところ見られない。そこで本研究ではまず、神埼キャンパス内における喫煙の現状を知るために、その実態把握を目的として調査を行った。

## 2 対象および方法

本学神埼キャンパス（健康栄養学部健康栄養学科、リ

ハビリテーション学部リハビリテーション学科、健康福祉学部社会福祉学科、スポーツ健康福祉学科）の学生および教職員、事務職員のうち休学者、退職者を除いた1,359人（学部学生1,208人、大学院生28人、教職員77人、事務職員46人）を調査の対象とした。

調査は2014年7月から11月にかけて無記名による自記式質問紙を用いて行った。学部学生を対象とした調査は、各学科の教員に協力を依頼し、承諾を得た講義の時間に調査者または調査協力者が調査の趣旨説明を行い、質問紙の配布・回収を行った。教職員と事務職員には調査者が口頭または書面にて趣旨を説明し、封書を用いた配布・回収を行った。

質問紙調査の項目は、先行研究を参考にし、基本的属性（所属、年齢、性別、住居、恋人の有無、居住形態）および喫煙に関する項目（喫煙経験・習慣の有無、喫煙開始時期、喫煙のきっかけ、禁煙の有無、禁煙理由）、ニコチン依存度テスト（ファーガストロームのニコチン依存度指数（FTND））（別紙1）、加濃式ニコチン依存度調査票（KTSND））（別紙2）、喫煙に対するイメージの4項目とした。データ解析にはExcel 2013、エクセル統計第3版、SPSSver 16.0Jを用いて、有意水準5%で $\chi^2$ 検定、t検定を行った。なお、本調査の実施にあたっては、西九州大学倫理委員会より承認を得た（承認番号H26 1）。

## 3 結果

分析の対象は、回答が不十分であった者や調査参加へ同意が得られなかった者を除く1,061人（男性415人、女性650人）であり、有効回答率89.4%であった。回答者の平均年齢（ $\pm$ SD）は、19.9（ $\pm$ 1.4）歳であった。教職員は77人の内57人（74.0%）、事務職員では46人の内37人（80.4%）であったが、本稿では、学部学生の結果についてのみ報告を行う。

### 3.1 神埼キャンパスの喫煙状況（表1）

質問紙調査において、「現在、喫煙習慣がある」、「昔、喫煙習慣があったが、現在は無い（たまに吸う程度）」と回答した者を喫煙者、「今は吸わないが、過去に喫煙をしたことはある」を禁煙者、「喫煙したことがない」を非喫煙者の3群に区分した。神埼キャンパスの学部学生の喫煙者は150人であった。男性105人、女性45人であり、学部学生全体の14.1%を占めていた。男女別で割合を見ると、男性25.4%、女性6.9%である。非喫煙者80.0%で、禁煙者は5.8%であった。喫煙者の平均年齢（ $\pm$ SD）は20.4（ $\pm$ 1.4）歳であった。特に、「習慣的喫煙あり」者に限定した場合では117人（男性86人、女性31人）で、これはキャンパス全体の学部学生の約1割に相当する割

表1 神埼キャンパス学部学生の喫煙状況

	総数		健康栄養学科			リハビリテーション学科			社会福祉学科			スポーツ健康福祉学科		
	人	%	人	% <sup>*1</sup>	%	人	% <sup>*1</sup>	%	人	% <sup>*1</sup>	%	人	% <sup>*1</sup>	%
総数	1061	100.0	439	41.4	100.0	288	27.1	100.0	301	28.4	100.0	33	3.1	100.0
喫煙者	150	14.1	41	27.3	9.3	56	37.3	19.4	49	32.7	16.3	4	2.7	12.1
禁煙者	62	5.8	22	35.5	5.0	22	35.5	7.6	15	24.2	5.0	3	4.8	9.1
非喫煙者	849	80.0	376	44.3	85.6	210	24.7	73.0	237	27.9	78.7	26	3.1	78.8
男性	413	100.0	78	18.9	100.0	173	41.9	100.0	135	32.7	100.0	27	6.5	100.0
喫煙者	105	25.4	15	14.3	19.2	49	46.7	28.3	38	36.2	28.1	3	2.9	11.1
禁煙者	41	9.9	9	22.0	11.5	19	46.3	11.0	10	24.4	7.4	3	7.3	11.1
非喫煙者	267	64.6	54	20.2	69.2	105	39.3	60.7	87	32.6	64.4	21	7.9	77.8
女性	648	100.0	361	55.7	100.0	115	17.7	100.0	166	25.6	100.0	6	0.9	100.0
喫煙者	45	6.9	26	57.8	7.2	7	15.6	6.1	11	24.4	6.6	1	2.2	16.7
禁煙者	21	3.2	13	61.9	3.6	3	14.3	2.6	5	23.8	3.0	0	0.0	0.0
非喫煙者	582	89.8	322	55.3	89.2	105	18.0	91.3	150	25.8	90.4	5	0.9	83.3

喫煙者：現在喫煙習慣あり/過去喫煙習慣あり（今も時々吸う）

禁煙者：過去喫煙習慣あり（今は吸わない）、非喫煙者：喫煙習慣なし

\*1 喫煙状況別に対する各学科の割合

表2 神埼キャンパス学部学生の成年・未成年別、性別の喫煙率

年齢	総数		男性		女性	
	喫煙者(%) / 対象者【%】*1					
20歳未満	39 (26.0) /	446 【100】	32 (30.5) /	170 【82.1】	7 (15.6) /	276 【17.9】
18歳	9 /	174	7 /	63	2 /	111
19歳	30 /	272	25 /	107	5 /	165
20歳以上	111 (74.0) /	615 【100】	73 (69.5) /	243 【65.8】	38 (84.4) /	372 【34.2】
総数	150 (100.0) /	1061	105 (100.0) /	413	45 (100.0) /	648

\*1 成年、未成年それぞれの男女別割合

合であった。喫煙者（150人）の学部学科別内訳は、健康栄養学科41人（27.3%）、リハビリテーション学科56人（37.3%）、社会福祉学科49名（32.7%）、スポーツ健康福祉学科4人（2.7%）であった。男女別の喫煙率は男子学生25.4%、女子学生6.9%と男子学生の喫煙率が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。各学科内での喫煙者が占める割合は、健康栄養学科9.3%、リハビリテーション学科19.4%、社会福祉学科16.3%、スポーツ健康福祉学科12.1%であった。学科別の喫煙者割合は、最も多いリハビリテーション学科と、健康栄養学科の間で10.1ポイントの差がみられた。各学科での喫煙者割合を男女別に見ると、スポーツ健康福祉学科以外の学科では、男性の方が女性よりも喫煙者割合が高かった。しかし実数で見ると健康栄養学科の喫煙者（41名）は男性喫煙者（15人）に対し女性喫煙者（26人）の方が多く存在していた。

また、神埼キャンパスの学部学生喫煙者（150名）のニコチン依存度テスト（別紙参照、10点満点）の平均値は5.5（±3.0）で、中程度の依存度を示していた。

### 3.2 未成年者の喫煙状況（表2、表3）

学部学生喫煙者を成年、未成年に分けて観察すると、150人のうち未成年喫煙者は39人で26.0%を占めていた。性別で見えていくと、男性喫煙者は105人のうち32人

（30.5%）、女性喫煙者では45人のうち7人（15.6%）であった。未成年喫煙者の特徴をさらに各年齢別に見てみると、18歳、19歳と年齢が上がるにつれて、男女ともに喫煙者数が約2.5倍から3.5倍に増加する傾向がみられた。また未成年喫煙者の男女比は、男性が8割以上を占めていたが、成年喫煙者の場合のそれは女性が3割以上を占めていた。

未成年喫煙者の所属学科は健康栄養学科10人（25.6%）、リハビリテーション学科18人（46.1%）、社会福祉学科7人（17.9%）、スポーツ健康福祉学科4人（10.3%）となっており、リハビリテーション学科の学生が未成年喫煙者の約半数近くを占めていた。

神埼キャンパス学部学生の未成年者全体に占める喫煙者の割合は446人中39人（8.7%）であった。各学科の未成年学生に占める喫煙者割合を見ていくと、健康栄養学科は198人中10人（5.1%）、リハビリテーション学科は129人中18人（14.0%）、社会福祉学科は86人中7人（8.1%）、スポーツ健康福祉学科は33人中4人（12.1%）を占めていた。リハビリテーション学科内の未成年者に対する未成年喫煙者割合は14.0%で神埼キャンパス内では最も高い割合を占めていた。

統計学的有意性については、所属学科（ $p = 0.001$ ）、喫煙習慣の有無（ $p = 0.047$ ）、喫煙開始時期（ $p = 0.023$ ）

表3 2群（未成年学部学生・成年学部学生）による喫煙者の比較

		未成年喫煙群 (%) N = 39		成年喫煙群 (%) N = 111		p 値 <sup>*1</sup>
ニコチン依存度テスト	全学科	5.5 (±3.2) <sup>*2</sup>		5.5 (±3.0) <sup>*2</sup>		0.955 <sup>*3</sup>
所属学科	健康栄養学科	10	(25.6)	31	(27.9)	0.001
	社会福祉学科	7	(17.9)	42	(37.8)	
	スポーツ健康福祉学科	4	(10.3)	0	(0.0)	
	リハビリテーション学科	18	(46.1)	38	(34.2)	
性別	男性	32	(82.1)	73	(65.8)	0.056
	女性	7	(17.9)	38	(34.2)	
居住形態	アパート	17	(43.6)	41	(36.9)	0.772
	実家	20	(51.3)	65	(58.6)	
	寮	2	(5.1)	4	(3.6)	
	その他	0	(0.0)	1	(0.9)	
特定の異性の友人	あり	17	(43.6)	60	(54.1)	0.261
	なし	22	(56.4)	51	(45.9)	
喫煙習慣	習慣性あり	26	(66.7)	91	(92.0)	0.047
	たまに吸う程度	13	(33.3)	20	(18.0)	
喫煙開始時期	小学生	1	(2.6)	6	(5.2)	0.023
	中学生	18	(46.2)	32	(27.8)	
	高校生	12	(30.8)	24	(20.9)	
	高校卒業後	8	(20.5)	26	(22.6)	
	20歳以上	0	(0.0)	23	(20.0)	
喫煙のきっかけ	何となく	7	(17.9)	36	(32.4)	0.032
	交際相手の影響	1	(2.6)	4	(3.6)	
	家族の影響	3	(7.7)	2	(1.8)	
	友人の勧め	11	(28.2)	21	(18.9)	
	年上(先輩など)の人の勧め	8	(20.5)	7	(6.3)	
	好奇心	8	(20.5)	27	(18.9)	
	カッコいい	0	(0.0)	2	(1.8)	
	その他	1	(2.6)	12	(10.8)	
	喫煙の将来的な不安	不安あり	10	(25.6)	53	
不安なし	8	(20.5)	24	(21.6)		
どちらでもない	21	(53.8)	34	(30.6)		

\*1  $\chi^2$ 検定 \*2 テストの全項目に回答した未成年学生 N = 39 成年学生 N = 98 の平均値 (±SD) である

\*3 t 検定

喫煙のきっかけ ( $p = 0.032$ ) で有意な違いが見られた。一方、居住形態、性別、特定の異性の存在、喫煙による将来的な不安については有意な違いは見られなかった。ニコチン依存度テスト (FTND) の数値【平均 (±SD)】については未成年群では  $5.5 (\pm 3.2)$ 、成年群では  $5.5 (\pm 3.0)$  で t 検定の結果、両群に有意な違いは見られなかった。

#### 4 考 察

本学神埼キャンパスの学部学生の喫煙者割合は男子学生の約 4 人にひとり、女子学生の 14 人にひとりという割合であった。日本私立大学連盟が 2011 年に実施した調査<sup>8)</sup>によると私立大学生の喫煙率は 12.2% (男性 19.0%、女性 4.0%) となっており、神埼キャンパス学部学生全体の 14.1% (男性 25.4%、女性 6.9%) と比較すると大きな差はなかったが、男女別だと本学男子学生の方が高い喫煙率であった。男性の方が女性よりも喫煙率が高いということでは先行研究と一致していた。

吉田ら<sup>9)</sup>の中学生を対象とした報告では男性の喫煙経

験者は喫煙願望を肯定する者が多く、禁煙教育の受け入れが困難である可能性を示していた。また、周囲が喫煙を勧めた場合、男子生徒の方が受容しやすいなど周囲からの対応に性差が存在するとしており、保健行動の観点から男女それぞれの特徴を把握し検討することも必要である。

また平成 24 年国民健康・栄養調査<sup>10)</sup>による 20 代 (24.3% : 男性 37.6%、女性 12.3%) の喫煙率との比較では、神埼キャンパス学部学生の 20 代 (18.0% : 男性 29.9%、女性 10.2%) の方が下回っていた。これは国民健康・栄養調査には学生だけではなく社会人が多く含まれており、収入面でタバコを購入しやすいこと等による違いがあると考えられる。

本調査の結果、未成年群と成年群ではニコチン依存度テストの結果には違いは見られなかったが、所属学科、習慣的喫煙、喫煙開始時期、喫煙のきっかけでは両群に有意な違いがみられた (表 3)。学科の喫煙率はリハビリテーション学科が 19.4% と最も高く、健康栄養学科 (9.3%) と比べると 10.1 ポイントの差がみられた。神田ら富田らによる先行研究では理学・作業療法学専攻学

生の喫煙率は6.3%<sup>11)</sup>、理学療法士を対象とした調査では23.0%<sup>12)</sup>という報告がある。リハビリテーション学科は未成年学生の喫煙率が高く、キャンパス内の未成年喫煙者の約半数を同学科の学生が占めていたことは大きな特徴であった。健康栄養学科は学科学生に占める喫煙者の割合としては大きくはないものの、喫煙女性の約2人に1人が健康栄養学科であった点は大きな特徴である。スポーツ健康福祉学科は喫煙者が4名であったが全員が今年度入学した1年生であり、未成年者である点は問題である。

喫煙開始時期は2群の間に有意な違いがみられたが、両群ともに中学生の頃に最初の喫煙を経験している者が最も多く、小学生の頃という回答者もみられた。このことは、本学学生に限った特徴ではない。実際、佐賀県内の調査では小学生に喫煙を開始している者が確認されている<sup>13)</sup>。また、佐賀県医師会による喫煙予防教室は「初発の曝露前」(小学校高学年)に絞って実施されていることから<sup>14)</sup>中学時代に喫煙を開始する者が多いことが示唆される。一方、高校卒業後から20歳未満の間に喫煙を開始している者が両群ともに2割を占めていること、さらに成年学生群の2割は成人後に喫煙を開始したことがわかった。これは高校卒業後あるいは本学入学後に喫煙を開始した人たちであり、本学の敷地内に喫煙所があるという環境がこれらの人たちの喫煙開始や喫煙習慣を支持している可能性が考えられる。

中島らや小牧らなどの報告では大学内での敷地内全面禁煙が喫煙率の低下に効果がみられた(表4)<sup>15-18)</sup>。先行研究で男女別の喫煙率を算出していたK医科大学、高崎健康福祉大学の2つの大学の敷地内全面禁煙実施前後の喫煙率を比較すると、男性13.9あるいは18.3ポイント、女性6.8あるいは7.5ポイントに減少していた。一方、埼玉県立大学、岐阜大学は男女合わせた喫煙率であったが、両大学ともに敷地内禁煙を実施することで4.1あるいは7.9ポイント減少していた。K医科大学と高崎健康福祉大学の先行研究の結果の平均値を本学神埼キャンパスに当てはめて試算すると、神埼キャンパスで敷地内禁

煙化を実施した場合、男性は10%台、女性は1%以下の喫煙率が期待できるであろう。

しかし、清らの報告では敷地内全面禁煙を行っても近隣に喫煙できる環境がある場合、喫煙率低下に効果がなかったとしている<sup>19)</sup>。本学のみが禁煙環境を整えても周囲の飲食店等、学外での喫煙が可能であれば、根本的な解決は困難であることが懸念される。また、秋田大学のように、敷地内全面禁煙を断念した大学も過去に4例が報告されていることから<sup>6)</sup>も、単に喫煙コーナーを撤去するだけでは学生のたばこ問題の解決にはならない。先行する大阪大学、龍谷大学が実施しているような、禁煙教育プログラムや禁煙相談などのサポート体制の充実による医学的、心理的支援、キャンペーンや新生を対象とした説明会など学内での広報活動の充実も必要であろう。また、ニコチン依存者のニコチン離脱症に対するケアも考慮しニコチンパッチなどのニコチン代替療法を取り入れるなど敷地内全面禁煙に移行する前段階から実施以降も禁煙・防煙サポートを充実させることも重要であり、卒煙ブースへの切り替えなど段階的な対応を行うという工夫も考えられる<sup>7,20)</sup>。

未成年者の喫煙率は8.7%であり、医療系の大学である熊本保健科学大学12.1%<sup>21)</sup>と首都圏の5大学文系の1年生10.6%<sup>22)</sup>と比べ低い割合であったが、喫煙者の約4人に1人(26.0%)、男性喫煙者では約3人に1人(30.5%)が未成年であること、未成年者が法的に喫煙を認められていないことから、この結果は見過ごすことのできない問題である。また、喫煙者に対する各年齢の割合が18歳から19歳へ年齢が上がる際、大きく増加する傾向がみられた。これは今まで喫煙が身近でなかった者も喫煙所を有する大学という環境が日常的に学生や教職員の喫煙風景を見ることで、喫煙意欲を持ち喫煙習慣者となったとも考えられる。喫煙風景を無くす点では敷地内全面禁煙化が有効であるが、すでに述べているように敷地外喫煙へ移行しないよう支援しなければならない。

本研究から神埼キャンパス学部学生の喫煙の特徴が明らかになったが、この情報は学生の自記式質問紙調査の

表4 敷地内全面禁煙実施大学の喫煙率の変化

	実施年	実施前	実施後	減少ポイント	調査時期	実施前	実施後
男女別							
K医科大学	2004年	男子36.0%、女子11.5%	男子22.1%、女子4.0%	男子13.9、女子7.5	2003年	2007年	
高崎健康福祉大学	2006年	男性25.2%、女性7.6%	男性6.9%、女性0.8%	男性18.3、女性6.8	2005年	2013年	* 2005年のみ教職員を含む
平均		男性30.6%、女性9.6%	男性14.5%、女性2.4%	男性16.1、女性7.2			
本学神埼キャンパス	2014年	男性25.4%、女性6.9%					
	実施年	実施前	実施後	減少ポイント	調査時期	実施前	実施後
総数							
埼玉県立大学	2005年	9.4%	5.3%	4.1	2005年	2010年	
岐阜大学	2005年	10.8%	2.9%	7.9	2003年	2011年	
平均		10.1%	4.1%	6.0			
本学神埼キャンパス	2014年	14.3%					

結果のみに依っている。そのため、喫煙の有無や喫煙量については多少のバイアスがあることが推測される。この点については考慮が必要だと思われる。

本報告は喫煙状況を学部学生全体、学科別、性別、年齢階級別にみた分析であるが、本学神埼キャンパス男性学部学生と未成年者の喫煙率が高く、管理栄養士と理学療法士、作業療法士など本学でも特に医療現場に近い学科で喫煙者が多いことなどが問題であろうと示唆された。

## 5 謝 辞

調査に参加して下さった神埼キャンパスの皆さまに御礼申し上げます。また執筆にあたり健康栄養学部健康栄養学科4年勝屋琴絵さん、帆土綾夏さんの卒業論文のデータの一部を使わせて頂きました。ここに感謝の意を記します。

## 6 引用文献

- 1) 臼田寛、玉城英彦、紺野圭太、河野公一：「たばこ規制枠組み条約」の成立過程と今後の運用方向性、日本公衆衛生雑誌、50、1058、(2003)
- 2) 厚生労働省：健康増進法  
[http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/law/index\\_1.html](http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/law/index_1.html) (最終閲覧日2015年1月12日)
- 3) 厚生労働省：「健康日本21」最終評価  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001r5gc-att/2r9852000001r5np.pdf> (最終閲覧日2015年1月12日)
- 4) 厚生労働省：健康日本21(第二次)  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kenkounippon21.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippon21.html) (最終閲覧日2014年12月3日)
- 5) 厚生労働省健康局長通知：受動喫煙防止対策について、健発0225第2号
- 6) 日本学校保健学会「タバコのない学校」推進プロジェクト  
<http://openweb.chukyo-u.ac.jp/~ieda/Project.htm> (最終閲覧日2015年1月12日)
- 7) 大阪大学喫煙対策ワーキンググループ：喫煙対策ワーキンググループ報告書、平成25年10月  
<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/anzen/smoking/no/siryo04.pdf> (最終閲覧日2015年1月12日)
- 8) 社団法人日本私立大学連盟：“私立大学学生生活白書2011”、p15(2011)(ウェイヴインターナショナル)
- 9) 吉田由美、高木廣文、稲葉裕：中学生の喫煙と Health Locus of Control との関連、日本公衆衛生雑誌、54、704(2007)
- 10) 厚生労働省：平成24年国民健康・栄養調査報告  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyuu/h24-houkoku.html> (最終閲覧日2014年11月26日)
- 11) 神田清子、石田順子、反町真由、狩野太郎：保健学科学学生の喫煙状況と喫煙知識に関する調査、群馬保健学紀要、25、85(2004)
- 12) 富田和秀、高橋晃弘、飯塚眞喜人：呼吸リハビリテーション講習会に参加した理学療法士の喫煙率と禁煙教育がタバコに関する意識に与えた即時効果、日本禁煙学会雑誌、8、100(2013)
- 13) 原めぐみ、田中恵太郎：喫煙・受動喫煙状況、喫煙に対する意識および防煙防止教育の効果、日本公衆衛生雑誌、60、444、(2013)
- 14) 佐賀県医師会：防煙教育スライド  
[http://www.saga.med.or.jp/saga\\_med/home/medical/slide/slide.html](http://www.saga.med.or.jp/saga_med/home/medical/slide/slide.html) (最終閲覧日2015年1月12日)
- 15) 中島素子、三浦克之、森河裕子、西条旨子、中西由美子、櫻井勝、中川秀昭：大学敷地内禁煙実施による医学生の喫煙率と喫煙に対する意識への影響、日本公衆衛生雑誌、55、647(2008)
- 16) 小牧宏一、鈴木幸子、吉田由紀、那須野順子、市村彰英、新井恵、室橋郁生：大学における5年間の敷地内全面禁煙化が喫煙率に与える効果、日本禁煙科学会誌、4、1(2010)
- 17) 岐阜大学保健管理センター：保健管理センター年報(平成24年度)37、19(2013)
- 18) 東福寺幾夫、北爪晴香、小林博美：学生の喫煙に与える周囲の喫煙の影響について、日本禁煙科学会誌、8、6(2014)
- 19) 清奈帆美、藤井香、高橋綾、室屋恵子、合田味穂、森正明、辻岡三南子、広瀬寛、横山裕一、森木隆典、和井内由充子、齊藤郁夫：本大学における10年間の喫煙率推移と禁煙対策、慶應保健研究、29、77(2011)
- 20) 龍谷大学保健管理センター広報  
<http://www.ryukoku.ac.jp/hoken/kinen.html> (最終閲覧日2015年1月12日)
- 21) 三村孝俊、嶋田かをる、多久島寛孝、與座嘉康、山鹿敏臣、高橋徹、大川原正、田中ヨシエ：熊本保健科学大学学生の喫煙実態調査、保健科学研究誌、6、15(2009)
- 22) 原田隆之、笹川智子、高橋稔：大学生の喫煙支持要因の検討、日本禁煙学会雑誌、9、22(2014)

### 3. ニコチンの依存性 (4)

ニコチン依存度の判定法		0点	1点	2点	3点
①あなたは、朝目覚めてから何分くらいで最初のタバコを吸いますか		61分以後	31～60分	6～30分	5分以内
②あなたは、喫煙が禁じられている場所、例えば図書館、映画館などでタバコを吸うのをがまんすることが難しいと感じますか		いいえ	はい		
③あなたは、1日の中でどの時間帯のタバコをやめるのに最も未練が残りますか		右記以外	朝起きた時の目覚めの1本		
④あなたは、1日何本吸いますか		10本以下	11～20本	21～30本	31本以上
⑤あなたは、目覚めてから2～3時間以内の方がその後の時間帯よりも頻りにタバコを吸いますか		いいえ	はい		
⑥あなたは、病気でほとんど1日中寝ている時でも、タバコを吸いますか		いいえ	はい		

  

低い ←————— ニコチン依存度 —————→ 高い

0点      低い      2点 3点      ふつう      6点 7点      高い      10点

FTND(Fagerström Test for Nicotine Dependence)指数

© 厚生労働科学・中村 2002

#### ニコチン依存度の判定法

- ニコチン依存度を簡易に判定する方法の一つとして、6つの質問からなるFTND(Fagerström Test for Nicotine Dependence)指数がある。
- FTND指数は、喫煙者の血中ニコチン濃度と相関する。
- 一般に、FTND指数が高い人ほどニコチン依存度が高く、禁煙の過程でニコチン離脱症状(タバコが吸いたい、イライラ、落ち着きがなくなる、集中困難など)が強く出やすい。このような人にはニコチン代替療法を勧めるのがよい。
- ニコチン依存度を簡易に評価するには、FTNDの6つの質問項目のうち、特に血中ニコチン濃度と相関が高い喫煙本数と起床後最初に喫煙するまでの時間の2項目について問診する。目安として、喫煙本数が26本以上かつ起床後の喫煙時間が30分以内の場合は依存度が高いと考えられる。

加濃式社会的ニコチン依存度質問票 (Version 2.1) 2006/03/13 uploaded

---

質問票 (Ver.2.1) 30 点満点 正常範囲は 0~9 点

1. タバコを吸うこと自体が病気である。  
　　そう思う(0) ややそう思う(1) あまりそう思わない(2) そう思わない(3)
  2. 喫煙には文化がある。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  3. タバコは嗜好品 (しこうひん: 味や刺激を楽しむ品) である。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  4. 喫煙する生活様式も尊重されてよい。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  5. 喫煙によって人生が豊かになる人もいる。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  6. タバコには効用 (からだや精神に良い作用) がある。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  7. タバコにはストレスを解消する作用がある。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  8. タバコは喫煙者の頭の働きを高める。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  9. 医者はタバコの害を騒ぎすぎる。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
  10. 灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である。  
　　そう思う(3) ややそう思う(2) あまりそう思わない(1) そう思わない(0)
-

# **A Survey on Smoking on the Kanzaki Campus of Nishikyushu University characteristics of undergraduate students**

Sachiko Matsuda<sup>1,2</sup>, Michiyo Yokoo<sup>1</sup>

*Graduate School of Human Care Sciences, Nishikyushu University<sup>1</sup>,  
Department of Food and Nutrition, Nishikyushu University Junior College<sup>2</sup>*

( Accepted: February 25 , 2015 )

## **Abstract**

A questionnaire survey on smoking was conducted on undergraduate students on the Kanzaki Campus. The results showed that a total of 150 students smoked (14.1% of the student population). The proportion of smokers was 25.4% among male students and 6.9% female students. A total of 117 students (86 male, 31 female), or approximately 10% of the student population, were regular smokers. In terms of department, the proportion of smokers was high among students in the Department of Rehabilitation. Smokers had a mean age of 20.4 years, and their mean score on the FTND (Fagerstrom Test for Nicotine Dependence) was moderate. A total of 39 smokers (26%) were underage smokers, and 80% of them were male students. A comparison of underage and adult smokers revealed significant differences in the departments they belonged to, the timing at which they started smoking, and motivation for starting to smoke. However, no significant differences were seen in the results of the FTND. These results suggest that no major differences in the amount of smoking or smoking awareness exist between underage and adult smokers.

Key words : smoking, undergraduate students, underage students